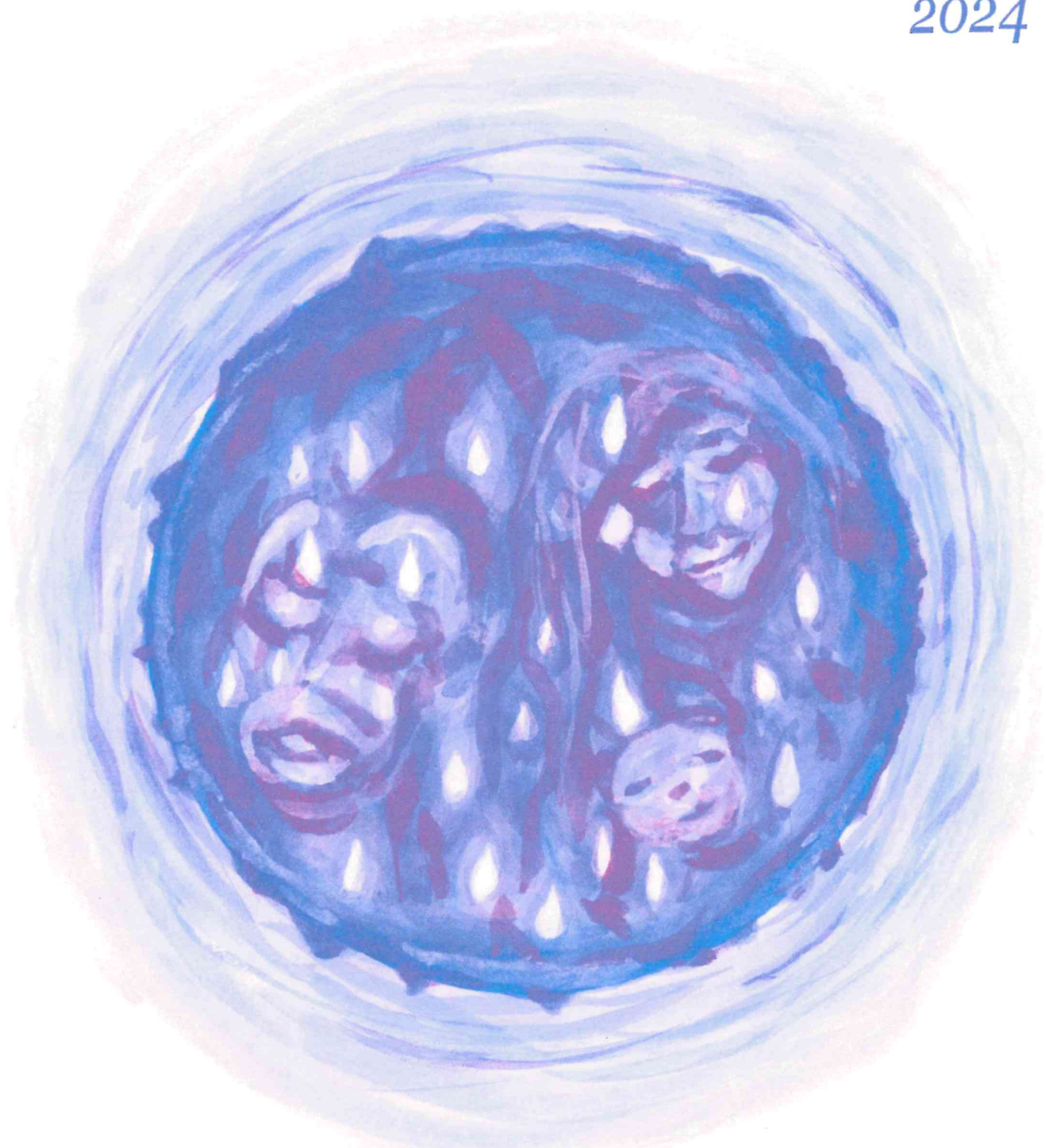


NO. **46**
最上の社会教育
2024



最上地区生涯教育推進協議会
山形県教育局最上教育事務所

発 刊 に あ た っ て

最上地区生涯教育推進協議会

会長 沼澤 稔

令和6年7月、県北部で発生した豪雨災害は最上管内市町村に甚大な被害をもたらしました。亡くなられた方々に深く哀悼の意を表し、被害に遭われた皆様に心よりお見舞いを申し上げますとともに、一日も早い復旧、復興をお祈り申し上げます。その爪痕はまだ至る所に残っており、改めて災害への備えやボランティア活動の大切さを痛感したところです。災害後の社会教育活動も中止や延期を余儀なくされましたが、市町村の復旧への決意と懸命な努力により次第に通常の活動が行われるようになりました。

最生協の事業に関しても予定通り終了することができ、市町村はじめ社会教育関係者の皆様に心より感謝とお礼を申し上げます。振り返ってみると、今年度の地区生涯学習推進大会はコロナ前に戻ったように多くの皆様のご参加をいただき真室川町で開催いたしました。サブテーマに「未来に伝えたいふるさとの宝～伝承文化の里づくり～」を掲げ、平枝少年番楽、口承文芸学研究者野村敬子先生のご講演、わら細工体験と歴史民俗資料館の見学と盛りだくさんの内容で、真室川町の歴史と伝承文化の魅力を存分に味わうことができたものと思っています。夏の中学生ボランティアセミナーや2月のボランティア交流会では、関係機関や団体と連携して楽しく有意義な活動を取り入れ、中高校生にボランティアの意義や魅力を発信することができました。また、今年度から理事会を2回にしたり、会議をオンラインで開催したり改善を図ってまいりましたが、それぞれの事業についての課題や改善点がありますので、十分に精査・検討を加えながら、次年度の計画に活かしていきたいと考えています。

家庭の生活様式が家庭の数だけあり、価値観が多様化し、高齢化率40%を超える超高齢化社会の最上管内にあって、社会教育の視点をどこにおき事業を行えば良いのか考える事があります。社会教育の対象者の半分は65歳以上の高齢者であることを考えると、高齢者を対象にした計画や事業を行っていくことが大切になってきます。豊かな経験と知識を持つ高齢者の社会資源を活用したり、学び合ったりすることは、今支援が必要になっている地域づくりにも好影響を与えます。社会全体が青少年健全育成や子育て・家庭教育に目が行きがちですが、対象の半分以上を占める高齢者を社会教育の土俵に上げ、高齢者対象の研修や活動が推進されることを期待したいものです。

さて、今年度の実践事例集「最上の社会教育・第46集」を刊行いたしました。各市町村教育委員会はじめ関係機関の皆様には活動事例をご提供いただき心よりお礼申し上げます。最上の社会教育実践の一端に触れていただける機会になりますので、是非、ご高覧いただきますようお願い申し上げます。

結びに、最上地区生涯教育推進協議会の更なる充実に向け、皆様方のご支援ご協力をお願い申し上げ挨拶といたします。

目 次

◇ 第46集の発刊にあたって

◇ 最上管内市町村教育委員会・県神室少年自然の家 社会教育・社会体育実践事例

＜新庄市＞	◇新庄開府400年記念事業 ダンスプロジェクト羽州ぼろ鳶組について	・・・	1
	◇新庄市・草屯鎮国際スポーツ交流事業について	・・・	3
＜金山町＞	◇かねやまアフタースクール2024	・・・	5
	～放課後子ども教室&学童クラブ共同イベント～		
	◇金山町町制施行100周年記念イベント	・・・	7
	「クロスカントリースキーイベント ～佐藤勇治さん講演会～」		
＜最上町＞	◇最上町「学社連携協働体制の構築」	・・・	9
	= コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体化をめざして =		
	◇最上町材木遺跡の発掘調査と成果報告について	・・・	11
＜舟形町＞	◇縄文の女神と若鮎の里 ふながた ふなっ子防災研修セミナー	・・・	13
	◇縄文の女神と若鮎の里 ふながた 第37回新春なわとび大会	・・・	15
＜真室川町＞	◇真室川町立歴史民俗資料館企画展	・・・	17
	「真室川の自然のきらめき～冬虫夏草の世界～」		
	◇第2回梅の里ロゲイニング	・・・	19
＜大蔵村＞	◇生涯学習講座	・・・	21
	◇運動指導者のための応急救護講習会	・・・	23
＜鮭川村＞	◇生涯学習講座「さけがわ発見塾」	・・・	25
	◇鮭川村スポーツ協会村制施行70周年記念事業	・・・	27
	スポーツでワクワクする鮭川村をつくろう！		
＜戸沢村＞	◇令和6年度 戸沢村青少年健全村民フォーラム「とざわけんきまる祭」	・・・	29
	◇第5回とざわジュニアスポレク祭	・・・	31
＜県神室少年自然の家＞	◇チャンスにチャレンジしてチェンジする	・・・	33
	～「アドベンチャーキャンプ」を通して～		
◇ 最上地区生涯教育推進協議会事業関係等	・・・・・・・・・・		35
◇ 表彰関係等	・・・・・・・・・・		47
◇ 生涯学習・社会教育関係各種大会のあゆみ	・・・・・・・・・・		52
◇ 実践事例集「最上の社会教育」歴代掲載内容一覧	・・・・・・・・・・		53

最上管内市町村教育委員会
山形県神室少年自然の家

社会教育・社会体育

実践事例

新庄開府 400 年記念事業 ダンスプロジェクト羽州ぼろ鳶組について

新庄市

1 はじめに

新庄市では、2025年に「新庄開府400年」を迎える。常陸松岡の地から、出羽最上の地についての初代藩主、戸沢政盛公。これまでの歴史や文化、まちづくりを振り返るとともに郷土への愛着と誇りを高め、次代を担う子どもたちと共に更なる発展につなげることを目的に「新庄開府400年記念事業」を実施している。

2 事業内容

新庄開府400年記念事業の一つである「ダンスプロジェクト羽州ぼろ鳶組」は新庄開府400年記念事業実行委員会総合アドバイザーである今村翔吾氏より提案されたもので、次世代を担う子どもたちが対象となる。

今村氏自身が夢を叶えるきっかけとなったダンスの取り組みを通して、ダンスが得意な子どもだけでなく、一歩踏み出せない子どもが本事業に参加することによって、豊かな創造力や思考力、コミュニケーション能力を養い、自己肯定感や他者とのつながりなどを獲得することを目的としている。

子どもたちの成長や、大人になっても子どもたちの心にいつまでも残るイベントとして、これからの新庄の未来を担う人材の育成につなげていくものとなる。

【対象者】

新庄市内の小学4年生から高校2年生（令和6年度現在）

※実際の参加者は小学3年生から高校2年生となっている。

【募集期間】

令和6年7月8日（月）～8月26日（月）

【説明会&体験会の開催】

令和6年7月15日（月・祝）

午前の部／9時30分～11時30分

午後の部／13時00分～15時00分

参加者数／合計95人

（大人：49人 子ども：46人）

【ダンスプロジェクト参加者】

小学生・・・21人

中学生・・・46人

高校生・・・2人

合計・・・69人

※令和6年12月1日現在

新庄開府 400 年
1625-2025

新庄開府400年記念事業

羽州ぼろ鳶組
ダンスプロジェクト
説明会&体験会

今村翔吾氏来場！

日時
令和6年7月15日(月・祝)
午前の部 9時30分～11時30分
午後の部 13時～15時
※体験会へ参加される場合は動きやすい服装で
参加してください。

場所
新庄市民プラザ 大ホール
※予約不要

問合せ先 ☎0233-23-5005
新庄市社会教育課社会教育係

3 事業報告

【説明会＆体験会の様子】

今村氏よりダンスプロジェクト羽州ぼろ鳶組実施に至る経緯や、同氏の想いを語った。
また、実際に踊るダンスや楽曲を初めて披露した。

披露後はダンスの体験会を開催し、参加者に体験してもらう機会とした。



【全体練習会の様子】

募集締め切り後の8月27日（火）の全体練習会を皮切りに、月1回（土日の2日間）練習を続けてきた。



4 来年度に向けて

新庄開府400年記念の本番を迎える令和7年度は、いよいよ練習の成果を披露する年となる。令和7年4月に予定している初披露会を皮切りに、270年を迎える「新庄まつり」でのダンスパレードや、9月28日（日）に実施される「新庄開府400年記念式典」での披露など、市内での披露の場を複数設ける予定となっている。

ダンスプロジェクト

羽州ぼろ鳶組

新庄市・草屯鎮国際スポーツ交流事業について

新庄市

1 はじめに

新庄市では、東京オリンピック・パラリンピック競技大会のホストタウンに登録されたことを契機に、令和5年度に相手国である台湾南投縣草屯鎮と国際友好交流協定を締結した。

国際友好協定～一部抜粋～

- 2 両地の教育の協力を広め、学校の相互交流及び学生国際交流の機会を促進する。
- 3 両地のスポーツ交流の機会を増進し、それぞれの支援と協力を提供する。

このような繋がりから、このたび、市内の小学校児童を台湾に派遣し、同年代とのスポーツ交流を実施することとした。

2 事業のねらい

子供たちのグローバルな視点の育成、世界を意識したスポーツ意識の醸成、交流相手に対し本市の魅力についての情報発信を目的とする。

3 事業概要

【参加者】

参加児童 19人

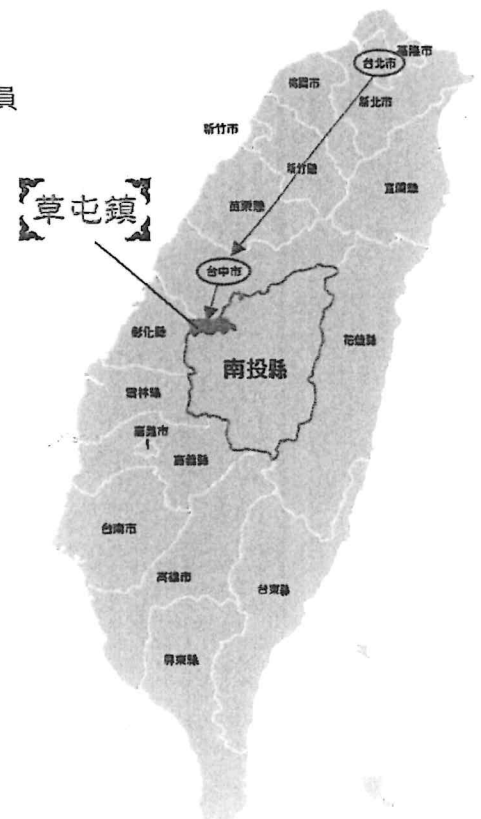
- ・新庄小学校 3人 ・日新小学校 7人 ・本合海小学校 1人
- ・明倫学園 6人 ・萩野学園 2人

引率者 5人

- ・新庄市教育長 ・学校教育課長 ・学校教育課職員
- ・社会教育課職員 ・保健師

【行程】

- 1 1月26日（火）
 - ・新庄駅東口から庄内空港・羽田空港を経由し、台湾松山空港へ
- 1 1月27日（水）
 - ・北投小学校との交流
 - ・草屯鎮公所へ表敬訪問
 - ・南投故事館見学
 - ・新庄小学校との交流
- 1 1月28日（木）
 - ・虎山小学校との交流
 - ・台北101見学
- 1 1月29日（金）
 - ・龍山寺見学
 - ・台湾松山空港から羽田空港・庄内空港を経由し、新庄駅東口に到着



4 事業報告

【交流の様子】

■北投小学校（11月27日（水） 10：20～12：00）

- ・リコーダー演奏による歓迎 ・学校の説明 ・愛玉づくり体験
- ・スポーツ交流（ドッチボール） ・お土産交換 ・軽食



■新庄小学校（11月27日（水） 15：30～17：30）

- ・弦楽器演奏による歓迎 ・生徒代表による挨拶 ・スポーツ交流（ミニサッカー等）
- ・お土産交換 ・軽食



■虎山小学校（11月28日（木） 9：45～12：00）

- ・合唱による歓迎 ・生徒代表による挨拶 ・スポーツ交流（ムカデリレー等）
- ・現地児童による学校案内 ・お土産交換 ・軽食



【成果】

- 現地の同年代の児童との交流を通じ、多様な価値観への理解を深め、グローバルな視点で物事を考えるきっかけとなった。
- 言葉の壁を乗り越え、英語やジェスチャーを使いながら意志を伝える力を高めた。
- 海外という慣れない環境で、自分で考えて行動する力を培い、自立心や責任感を高めた。
- 新庄市を代表する立場としての責任感を持ち、礼儀や態度を意識して行動した。
- 交流相手との友好関係を築くことができ、また、新庄市をPRすることにより、次は新庄市に行きたいという声をいただいた。

かねやまアフタースクール2024 ～放課後子ども教室&学童クラブ共同イベント～

金山町

1 はじめに

金山町では、平成18年度より、交流サロンぽすと2階を会場に「森の子ども図書教室」（放課後子ども教室）を実施している。「おはなしサークルきつねのボタン」がスタッフを務めており、図書の貸出しやクラフト活動により、子ども達の居場所となっている。

2 事業の目的

子どもたちが安心して過ごせる新しい居場所づくりのため、現在別々の場所で活動している放課後子ども教室と学童クラブの連携型実施に向け検討しており、今年度は「かねやまアフタースクール2024」を共同開催した。

3 具体的な取り組み

《第1回》

- ・開催日：6月5日（水）
- ・場所：金山小学校体育館
- ・参加者数：51名
- ・内容：町制施行100周年壁画制作
軽スポーツ etc.

町制施行100周年を記念して記念ロゴマークの巨大ちぎり絵制作を行った。また、金山健康ふれあいスポーツクラブスタッフの協力のもと、障害物リレーを行った。リレー中には仲間を応援する姿も見られ盛り上りを見せた。



《第2回》

- ・開催日：7月30日（火）
- ・場所：金山町農村環境改善センター
- ・参加者数：47名
- ・内容：町制施行100周年壁画制作
缶バッジ制作・お抹茶体験 etc.

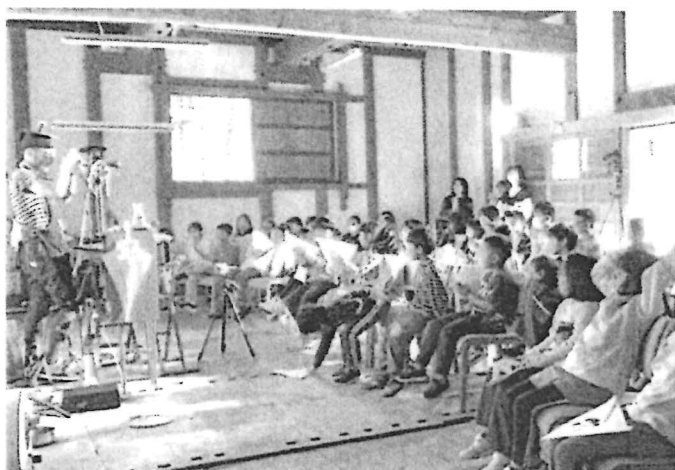
町内の有志団体による「蔵の会」協力のもと、希望者のみの有料体験ではあるが、お抹茶体験を実施した。初めてお抹茶を飲む子どもが多かったが、日本文化に触れるいい機会となった。

《第3回》

- ・開催日：9月30日（月）
- ・場所：町民グラウンド緑地広場
- ・参加者数：47名
- ・内容：運動遊び・宝探しゲーム

基地づくり・子どもの意見聴取 etc.

屋外での活動を試みた。当日は天候に恵まれ予定どおりに実施できた。基地づくりをしながら、参加した子ども達から今後やってみたい活動等について意見を集めることができた。



《第4回》

- ・開催日：10月25日（金）
- ・場所：いちやまの蔵
- ・内容：ICHI さんによる演奏会 etc.
- ・参加者数：49名

MOYA Kaneyama さんからの提案のもと、演奏会を実施した。廃材を使ったオリジナル楽器での演奏は、大盛況であり、音楽に触れ合うとても貴重な機会を提供できた。

4 成果と課題

《成果》

- ・全ての回の活動で外部の講師、特に地域で活動をしている人に依頼し実施できた。また、内容もクラフト活動だけでなく、スポーツや文化体験等も実施できた。
- ・全ての回で40名以上の参加があり、イベント的な活動の需要が高いことが分かった。また、リピーターが多く、全ての回に参加した子どもが多くいた。
- ・けが等の対応として、スタッフとして看護師を配置できた。
- ・スタッフの事前打合せや準備が整っており、関係団体との連携が上手くできた。そのため、全ての回でスムーズな実施ができた。

《課題》

- ・受付や帰りの際、子どもの動き方がスムーズになるような仕組みづくりが必要。
- ・今後、連携型での自立した事業実施に向けイベントを継続するために、アフタースクールの企画運営の調整役（コーディネーター）が必要。

5 終わりに

放課後子ども教室と学童クラブの連携型実施に向けての初となる合同イベントであったが、たくさんの子どもの参加があった。放課後の新たな過ごし方として合同イベントの需要が高いと感じたことから、今後は集約した子どもの意見も活かし、連携型での実施まで継続して事業を行っていきたい。

金山町町制施行 100 周年記念イベント

「クロスカントリースキーイベント ～佐藤勇治さん講演会～」

金山町

1 はじめに

金山町は、令和 7 年 1 月 1 日に町制施行 100 周年を迎えるにあたり、今年度は様々な記念イベントを実施した。その中で、町制施行 100 周年記念イベントとして、クロスカントリースキーのイベントを町制施行 100 周年記念イベントとして開催した。当町は、クロスカントリースキーを町技とし、強化している。近年では、新庄南高校金山校スキー部や金山中学校スキー部が全国大会で活躍している。

そこで、今回は町制施行 100 周年記念イベントとして実施したクロスカントリースキーイベントについて紹介していく。

2 具体的な取り組み

金山町町制施行 100 周年記念イベント
クロスカントリースキーイベント
～佐藤勇治さん講演会～

- ・開催日：9 月 7 日（土）
- ・場所：金山町農村環境改善センター
多目的ホール
- ・参加者数：80 名
- ・講師：佐藤 勇治 氏

北海道エネルギー（株）所属

金山町出身。金山高校卒業後、自衛隊に入隊。冬季戦技教育隊（体育学校）で勤務。主な成績としては、1995 年全日本選手権 30 km クラシカル 2 位。

選手引退後は、引き続きクロスカントリースキーのコーチとして勤務。2002 年ソルトレイキシティ、2006 年トリノ、2010 年バンクーバー、2014 年ソチのオリンピックにワックスマンとして帯同。2014 年ノルディックコンバインドの渡部暁斗選手の銀メダル獲得に貢献。2014 年からは、パラチームのワックスチーフに就任し、2018 年平昌パラリンピックで新田佳浩選手が金メダルを獲得。2022 年北京パラリンピックでは、川除大輝選手が金メダルを獲得に貢献した。その後、自衛隊を定年退官し、北海道エネルギー株式会社に入社。現在に至る。



・ 内容

一部 講演 演題「クロスカントリースキーの魅力と楽しみ方」

二部 実技講習会「より速く、より気持ちよく」

走るためのワクシングとストラクチャー

3 成果と課題

(1) 成果

○町内外からスキー関係者を中心に80名の参加者があった。

○実技講習について、参加された方から「今まで曖昧に行っていたワクシングでしたが、今回参加したことで正しい方法を学ぶことができた。」という嬉しい感想をいただいた。

(2) 課題

●実技講習の際の参加者へのワクシングの見せ方について、見えづらい部分があり、撮影方法や投影方法などを検討する必要がある。

●準備（スキー用具、備品等）や段取り（イベントの進め方等）について、改善するべき点があった。



4 終わりに

今回のイベント（講演会・実技講習会）を一つのきっかけとして、当町のクロスカントリースキー選手が意識を新たにし、その結果として、クロスカントリースキーの盛り上がりやスキー人口増加が期待できるものとなった。また、町民がクロスカントリースキーの魅力や楽しみ方を知る貴重な時間となった。

金山町のスポーツ振興のために今後も事業を行っていきたい。

最上町「学社連携協働体制の再構築」 ＝コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体化をめざして＝ 最上町

1 はじめに

従前より協議会を組織して事業を進めてきてはいるが、町の教育諸環境の変化、各校の学校運営協議会の進展をふまえ、事業内容との整合性を図りつつ、社会教育主導でのコミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体化をめざした体制の再構築に着手している。今年度の取り組み概要を紹介し、ご助言いただければ幸いである。

2 ねらい

地域と学校が双方向でパートナーとして実施する学校内外の活動のあり方を協議することで、開かれた学校づくりや学校の働き方改革を推進しつつ、地域全体で子どもたちのより豊かな学びや一層の成長を支えていくことをめざしていくことで、もって地域の教育力の向上を図ることを目的としている。

3 具体的な取り組みと事業の柱立て

(1) 各学校運営協議会の開催と活動

平成30年4月1日付けで最上町学校運営協議会規則が施行され、初めに大堀小にその次に最上中、最後は連続の統合があった向町小に令和4年度より学校運営協議会が導入され、全てがコミュニティ・スクールとなり、単独での協議会運営である。

協議内容等の資料は各校で準備しているが、協議会の開催案内や謝金の手続きは教育文化課学校教育室が実施している。各校とも年間3回開催しており、テーマや熟議の内容は、教育課程並びに教育計画への意見や、保護者・地域住民等の協力や参画のあり方をふまえた特徴的なものになっている。

- ① 大堀小学校運営協議会：委員は12名、熟議におけるテーマが具体的で、多くを実現させている。読み聞かせコンサート、図書室開放、地域写真展等
- ② 向町小学校運営協議会：委員は11名、閉校した4小学校区の適人材を委員に依頼し、広くなった学区に対応すべく、委員構成に工夫あり。
- ③ 最上中学校運営協議会：委員は14名、総合学習やキャリア教育の展開を意識した委員構成。学校の働き方改革と連動させた熟議テーマがタイムリーである。

(2) 最上町地域教育協議会の設置と開催

上記の各学校運営協議会の設置状況をふまえ、国・県が掲げる「コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的な取り組み」として、従来の最上町地域教育協議会の名称は残しつつ、従来の最上中学校の学校支援地域本部「もがみサポート塾」中心の運営協議から町全体の地域と学校の連携協働のあり方の協議や情報共有の場に移行させるために、規約を改正し、構成メンバーも、学校運営協議会会長、各校学社連携推進員、地区公民館長、事業関係者、町づくり部門担当者等の実務担当者中心とした。その背景には、各校の学校運営協議会の連絡会議の性格を持たせつつ、現在の3校単独での学校運営協議会から、町一本化を見通したものであり、さらに、各校の学校運営協議会と各校協働本部の機能の融合化をめざすためである。

また、以下の三つの実施事業に関するパフォーマンス指標について、児童生徒の意識の変容を数値化したものに変更し、事業の成果を評価していくこととした。

(3) 地域学校協働本部事業

以下の3校に協働本部を位置付け、コーディネーターを配置し、地域とのコーディネート業務と働き方改革に対応して主に図書環境整備を支援している。

- ① 大堀小学校協働本部：コーディネーター1名を配置
- ② 向町小学校協働本部：コーディネーター1名を配置、今年度は指導員と兼務
- ③ 最上中学校協働本部：コーディネーター2名を配置、「もがみサポート塾」運営

(4) 地域未来塾事業

最上中学校協働本部を実施主体との位置づけで、「もがみサポート塾」として地域コーディネーター1名を配し、5名の学習指導員が自主学習を支援している。

原則毎週月・水・金曜日の放課後1～2時間で年間110日程度の実施と、夏季・年末年始・年度末の各休業中3日間での3時間実施の二本立てである。

(5) 放課後子ども教室事業

本町の少年教室事業は半世紀以上の歴史があり、学校5日制導入後は補助事業を活用しつつ、放課後子ども教室事業として実施している。本町は、2つの小学校の児童を対象に放課後児童クラブを開設していることから、平日の放課後ではなく、休日である土曜日実施に特化させ、自然体験や農林業体験を中心としたものとなっている。

- ① わんぱく学校：大堀小学校の児童を対象に、年間7回の実施である。NPO法人「山と川の学校」に委託している。山と川をフィールドにした自然体験活動や稲作とキノコ栽培、キャンプ活動、異年齢交流が主なプログラムである。わんぱく学校卒業生がインリーダーとしてプログラムをサポートしている。
- ② ワイルドエドベンチャスクール：町内全小学生を対象に、冒険家大場満郎氏にコーディネート进行委託し、年間8回の実施である。前森高原の「冒険学校」をベースに、四季の自然を体感できる活動や米・野菜栽培の体験活動が中心である。育てた農作物の販売で得た収益金を町社会福祉協議会等に寄付するまで進展している。

(6) 家庭教育支援事業

県の「やまがた子育て講座」「幼児共育ふれあい広場」を活用し、各校・各幼児施設の家庭教育学級開催を支援している。全5か所をめざしている。

4 今後の展望

- 学校運営協議会の所管は学校教育室、地域学校協働本部事業は生涯学習室であり、事務分掌が異なることから、まずは教育文化課内からの一体化である。
- 学校の働き方改革も急務であるが、支えられるだけが学校ではないはず。学校が地域づくりにどう関わっていくべきか、その主体性も問われよう。その点、各校の学校運営協議会とこの地域教育協議会に町づくり推進室集落支援員に参画いただいていることは画期的な試みで、学校自身の、いい意味での化学反応を期待したい。
- 国・県の補助金を活用した事業でも町負担分が生じる。予算をいかに確保できるかが大きな課題である。そのためには、その重要性をより多くの人に理解いただき、予算確保のための応援団を増やさなければならない。

最上町材木遺跡の発掘調査と成果報告について

最上町

1. はじめに

最上町大字黒沢地内に所在する縄文時代晩期（約 2500 年前）の材木遺跡からは、緑色の石材を用いた勾玉等の装身具が数多く採集されてきた。これらは長年「翡翠（ヒスイ）」であると考えられてきたが、近年の石材鑑定によりそれは翡翠とは全く異なるもので、全国的にも希少性の高い石英主体の装身具であることが判明した。研究者の間では『緑色石英』と呼ばれているが、現地石材を用いた装身具製作事例自体が国内ではそもそも珍しく、仮に本遺跡での装身具製作の痕跡や実態が確認されれば縄文時代終末期の地域間交流や物流を含めた地域性の研究・解明に繋がることが大いに期待されたため、町や地元黒沢地区住民が全面協力する形で研究者らが主催する学術調査が下記により進められた。



2. 具体的な取り組み

(1) 学術調査概要

- ・所収遺跡 材木遺跡（遺跡番号 043、縄文時代晩期）
- ・所在地 山形県最上郡最上町大字黒沢
- ・調査期間 令和 5 年 9 月 5 日～9 月 13 日
- ・調査面積 25 m²
- ・実施主体 明治大学黒耀石研究センター 栗島義明氏



地権者の埋蔵文化財保護に対するご理解もあり、遺跡範囲と重なる畑地での耕作等は極力避けていただいたため、令和 5 年春に実施された事前踏査では過去の資料観察・情報提供と共に円滑に調査計画を練ることができた。調査開始後、まずは重機で表土を除去しながら中央部に 2×12m のトレンチを設定し、ジョレン等を用いて遺物包含層を丁寧に掘り下げていった。この作業過程において残念ながら遺構は確認できなかったが、土中には大量の土器片が含まれていた他、これを 6mm メッシュの篩にかければ石器等の微細な遺物回収が更に見込める状況と判断でき、篩にかけられた残土（土嚢約 80 袋）は引き続き公民館へと運搬し、更に細かい 2mm メッシュの篩を用いて土壌を水洗し、可能な限り遺物回収を試みた。選別された主要遺物については、この後の研究・分析のサンプルとして栗島氏が研究センターへ一旦持ち帰り、最終的に令和 5 年度末には報告書作成まで完結させている。



(2) 令和6年度 最上町文化講演会

- ・主 催 最上町・最上南部3町村縄文文化発信推進会議
- ・期 日 令和6年12月14日(土) 14:00~16:00
- ・場 所 最上町中央公民館2F みどりホール
- ・講 師 明治大学 黒耀石研究センター 栗島義明 氏
- ・演 題 「最上町材木遺跡の調査
～東北地方初の装身具製作遺跡の発見～」
- ・参加者 約30名
- ・その他 参加無料、出土遺物展示コーナー設置



本調査を主導した栗島氏を講師に招き、一般町民に向けた成果報告と位置付けての文化講演会を上記により開催した。調査へ協力された黒沢地区の住民のみならず、本テーマに関心を持たれた方々が町内外より多数参加した。縄文時代に装身具が用いられるようになった時代的背景を含めた丁寧な解説に始まり、その上で当該遺跡ならではの特性や背景が考古学の観点から新たに価値付けされたことは我々地元住民にとっても誇らしく、まだ解明されていない謎を含めて更に関心と期待が高まる貴重な機会となった。



3. 総括と今後の展望

昨年度の学術調査に始まった本事業もこの度の成果報告をもって一つ区切りがついたものと安堵する。町が独自に起こした事業ではないが、情熱ある研究者との出会いに始まり、更にはその先の繋がりやご縁があったからこそ、町としても調査協力の機会を得られたという点においては大いに感謝すべきものと捉えている。第一目標としていた緑色石英遺物並びに装身具製作痕跡の検出に関して言えば、従来出土品と合わせると現時点で合計100点余りの緑色石英製品が採集されたことになり、その特徴を見る限りにおいては、原石・分割・分断・粗割・整形・研磨・穿孔といういわゆる一連の製作工程を示す形状が安定的に確認されている。加えて、穿孔作業に用いられたであろう石錐は複数の存在が認められる中、その稜線部位に表れた著しい摩耗痕跡は、緑色石英のような硬質素材を対象に機能したであろうという推測を踏まえれば、緑色石英を素材にこの地で装身具製作が行われていたことは明らかであり、当該遺跡を語る上でも正に際立った特質・特異性として認められるとの結論に至ったところである。しかしながら緑色石英の原産地・採集箇所は未だ特定されていない。また、原石を見る限り河川転石による円磨作用等の痕跡も認められず、更には当町が置かれる地質構造等を考慮しても、この付近に産地が存在する可能性は極めて低いとの指摘があったのも事実である。課題は残るが、それでもこの度得た遺物や付加される情報等は、縄文時代当時の人々の生活実態や交流等の様相を知る上で貴重な手掛かりにもなり得るため、当課では資料の適切な保存や公開に努めると共に、将来的には文化財指定をも視野に入れた更なる事実追及を図るためにも、引き続き有識者らとの連携を強めていく。

1 はじめに

近年、県内でも大地震や記録的豪雨による自然災害が発生しており、全国的にも災害時における避難所での高校生の活躍が注目されている。当町でも、地域の自主防災組織の強化が重要である一方で、町の防災訓練では、若者の参加率が低く、特に高校生と地域の繋がりが希薄化していることが問題となっている。そのため、高校生と地域住民の関わる機会を増やすことが課題である。

2 事業のねらい

この事業は、高校生が研修会の中で主体的に計画・実行することで、自主性や協調性などを養い、高校生の成長に繋げることをねらいとしている。また、高校生が地域住民と協働して活動することで、地域との繋がりを深める効果が期待される。さらに、災害発生時等において、高校生が地域の一員として、積極的にボランティア対応できるよう人材の育成を行う。将来的には、高校生を対象に継続して防災に関する研修会を開催することで、地域との関わりを深め、地域で活躍できる人材育成を目指している。

3 具体的な取り組み

事業内容 開催日程：令和6年10月20日（日）

会 場：舟形町中央公民館（町指定避難所）

参 加 者：高校生 6名

町青少年育成推進員 2名

町職員 2名

講 師 1名

内 容：防災研修会

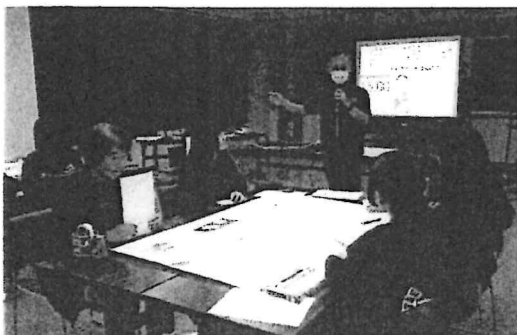
講師：ウェザーハート災害福祉事務所

代表 千川原公彦 氏

（1）防災セミナー

①高校生ができる防災についてのセミナー

②7月豪雨災害の体験談の情報共有



(2) 避難所の災害グッズを体験する

- ①簡易ベッドの組み立て
- ②災害用パーテーションの設営



(3) 災害時を想定した炊き出し

- ①おにぎりと芋煮の炊き出し
- ②町青少年育成推進員より調理指導



4 成果(◎)と課題(△)

- ◎高校生の防災知識が深まり、災害時において高校生だからできることを学ぶきっかけとなった。
 - ◎避難所の設営の際に、簡易ベッドや防災用非常食、避難所物品等を実際に見ることで防災意識が高まった。
 - ◎町青少年育成推進員と協力して炊き出しを行うことで、積極的なボランティア精神を育むことができた。
- △予定していた参加人数より少なかった。また、今後は高校生ボランティア会員だけでなく、広く周知を図り、防災力の向上に努めていく。

5 終わりに

講義やワークショップ、パーテーションやベッド設営、炊き出し等を行うことで、高校生が防災への理解を深めることができた。また、防災に対する興味関心を高め、自分達に何ができるのかを考える良い機会となった。今後も高校生が地域と関わる機会を増やし、地域で活躍できる人材育成に繋げていきたい。

縄文の女神と若鮎の里 ふながた

第37回新春町民なわとび大会

舟形町

1 はじめに

本大会は、冬季間の運動不足を解消するため昭和62年度に始まり、今年度で37回目を迎えた。毎年1月第3日曜日に開催している。

競技は個人の部と団体の部があり、個人の部は10分の制限時間を設定し競い、決着がつかない場合は二重跳びの連続回数で勝敗を決める。団体の部は1チーム10名で編成し2名が大縄をまわし8名が跳び、跳んだ回数で勝敗を決める競技となっている。

2 事業のねらい

気軽に出来る体力作りとしてのなわとびを全町民に広めたいという趣旨のもと、町民の冬季間の運動不足解消と健康づくりを目指している。また、なわとびは、小学生から大人まで男女問わず誰でも気軽に参加できる競技であり、運動を通じて参加者相互の交流を深めることをねらいに開催している。

3 具体的な取り組み

事業内容 開催日程：令和7年1月19日（日）

会 場：舟形町B&G海洋センター

参 加 者：地域住民 211名

内 容：【個人の部】小中学生男子の部・小中学生女子の部
一般男子の部・一般女子の部

【団体の部】小学生の部・中学生の部・一般男子の部
一般女子の部・一般混成の部

（1）開会式

①主催者によるあいさつ

②事前の準備運動



(2) 競技

①団体競技

②個人競技



4 成果(◎)と課題(△)

◎地域住民の冬季間の運動不足解消に繋がり、事業の目的を達成できた。

◎運動する楽しさを感じながら、運動能力の向上にも繋がっている。

◎なわとびを通じて地域交流を深めることができた。

◎町スポーツ推進委員会の協力のもとスムーズな運営がなされた。

△小・中学生の参加率が低くなっていることに加え、一般層の参加率もまだまだ低い状況にあるため、広報活動に力を入れ更なる事業の発展に繋げていきたい。

△参加団体が固定化しているため、新規の団体が増えていない。また、団体戦に比べて個人戦への出場が少ない。

5 終わりに

本大会を来年度以降も継続し、地域住民の冬季間の体力作りと地域交流を図っていききたい。そのためには、どの事業でも課題となるのが参加者の確保である。参加者が増えるようにお楽しみ抽選会の開催や上位の団体、個人に景品を準備するなど工夫しながら、参加者のモチベーション向上に繋げている。一度本大会に参加するとリピートで参加する人が多いため、参加するまでの声かけや周知が課題である。

また、事業を実施するには関係団体の協力が不可欠であるため、より一層関係団体が連携し、より良い大会運営に努めていきたい。